

詠む広場

毎日俳壇

西村 和子 選

初雪や後継ぎのなき棚田にも

福知山市 森井 敏行

△評▽古人は初雪に予祝の意味を重ねていた。句の内容は暗いが、季語が救いをもたらしている。雪景色も明るく美しい。

小春日や児は泥だんご磨きをり

鹿児島市 岡村梨枝子

△評▽大人がものを干したり庭仕事している傍らで、子どもは。助詞が効果的。

小春日の海を見てゐる風見鶏

神奈川 中島やさか

待ち人の来ぬ街角の寒さかな

藤枝市 山村 昌宏

短日のビル上りゆくビルの影

北本市 萩原 一行博

山眠る父祖の拓きし野を抱き

潮来市 萱原 綾川

江ノ電の揺れを楽しみ冬あたたか

熊本市 加藤いろは

亡き父のマフラーを巻き墓参

東京 東 賢三郎

こんなところに隠し引き出し煤払

我孫子市 桑原真喜子

言ふほどは多忙でもなく年の暮

湖西市 宮司 孝男

井上 康明 選

青空の果てにぶつかる枯野かな

東京 伊藤 公一

△評▽郊外に広がる枯れ野を思い浮かべた。作者は街空を仰いで歩きつづけ、いきなり果てしない枯れ野に出会ったのである。

山塊を雲押ししつる冬至かな

甲府市 清水 輝子

△評▽連なる峰々を雲が流れていく冬至の日の山国の風景。一句に流れる緊密な響きにひかれた。着ぶくれて手足あること安心す

わたつみの供華として咲け野水仙

福岡市 三十田 燦

対岸の焚火の炎風に折れ

岸和田市 妙中 正

冬青空青きはまりて鱒入れり

富士市 後藤 秋臣

過去帳に同じ名のあり枇杷の花

小平市 中澤 清

からつ風走る耕作放棄田

広島市 村越 緑

閑や無聊に溶かす和三益

高松市 島田 章平

亡き父の書きし系図や煤払

鹿児島市 岡村梨枝子

亡き父の書きし系図や煤払

国分寺市 野々村澄夫

片山由美子 選

消ゆるまで尾灯見守る寒暮かな

神奈川 中島やさか

△評▽尾灯が見えなくなるまで見送る車に乗っているのは、当然大事な人だろう。じわじわと迫る寒さの中に立ち尽くす姿が浮かぶ。年惜しむあと数ページ読み残し

年惜しむあと数ページ読み残し

青森 米内山貞子

△評▽年内に読みきるつもりの本だったのにという残念さ。年惜しむの「惜しむ」が効いている。餅搗や上がり櫃に子ら並び

餅搗や上がり櫃に子ら並び

札幌市 清水 志

一年の早かつたこと日記買ふ

小林市 黒木 暢

陽の温み失せゆく午後の枯野かな

野田市 押江 成行

買初のいささか重き福袋

春日市 林田 久子

公園のベンチに独り木の葉雨

岐阜市 透 乙美

風に浮き風に沈みし冬の蝶

松阪市 赤塚 弘一

ポストまで冬夕焼の消えぬうち

松山市 村重 香霞

主婦と書き無職と直す春隣

千葉市 斉藤まち子

小川 軽舟 選

父老いて甘え上手や玉子酒

平塚市 高橋 佳代

△評▽昔は威厳のある父親だったに違いない。それが今では、ちょっと風邪気味だと訴えては娘に玉子酒をせがむ。

遥かなる富士より高く蒲団干す

東京 土方けんじ

△評▽「富士より高く」が晴れ晴れして気持ちよい。布団に惜しみなく日が降りそそぐ。

安普請なれど牡蠣小屋酒旗高し

仙台市 引地 恵一

白き朝山茶花ひとつ咲きにけり

神戸市 中林 照明

柳刃も出刃も研ぎたる年用意

東京 小栗しづゑ

残照の細き一筋冬の川

さいたま市 池田 雅夫

蹲踞に水満々と石路の花

川崎市 久保田秀司

また会はず車窓に見えて冬帽子

八王子市 井上 幸子

竹籠を編む禅僧の小春かな

富士市 後藤 秋臣

ひかりなき指環を拾ふ枯野かな

東京 古沢 嘉玉

うたは奏でる

語彙がないから 染野太朗

昨年『初恋』などという歌集を出してしまっただけから、恋の歌について書いたり語ったりする機会が増えた。しかし、恋の歌を大量に作れるからと言って他人の恋の歌について深く鑑賞できるかと言えはそれはまったく別の話で、しかも本音を言えば、私は他人の恋の歌にあまり興味がない。だいたい他人の恋の歌なんて気恥ずかしくてまともには読めない。私の恋の歌だっけと読者を赤面させている。そもそも、恋とは何なのかというところさえ私にはよくわからない。・ポトルシップの底に小さな海がある。語彙がないから恋になるだけ 榊原紘この「海」は恋心の比喩だろうか。しかしそれを「語彙がないから」と言って否定している。あるいは認めようとしないう。たまたまそこに使い勝手のよい「恋」という言葉があるから他者に対するとある心情をそう呼ぶだけで、そしてそれを美化できるというだけで、もっと詳細に心を観察して別の言葉をあてがえば、それは単なる執着や嫉妬、寂しさや悔しさの一形態でしかないのかもしれない。・数字しかわからなくなった恋人に好きだよと囁いたなり 4 青松輝「数字しかわからない」のなら「好きだよ」の囁きさえ恋人には理解されないはずだ。だとしたらこの「4」は何を意味するのか。「私も好きだよ」や「うれい」だとは限らない。私にはこの数字が他者との避けがたいディスプレイコミュニケーションの象徴のようにも思える。・きみはきみばかりを愛しほくはほくばかりのおもいに逢つ星の夜 村木道彦(そのめ・たろ)歌入